

よみうり堂

書・榊 莫山

『地鳴き、小鳥みたいな』
保坂和志著

作家が好んで読む作家。
保坂和志にはそんな形容が
ついて回る。何の褒辞もな
さそうな設定でも、この作
家の手にかかると何だか奇
妙な世界が生まれ出す。小
説というジャンルの一番奥



地鳴き、小鳥みたいな
保坂和志
*2016年刊、講談社
(1500円)

名著

60

言葉を楽しむ

現代×文芸

22

にある、薄暗い秘密に手を
触れるような文章なのだ。
四つの短篇をおさめた本
書では、身辺雑記風のタッ
チで老作家の訃報、山梨の
大雪、自身の骨折、猫の病
気、カルチャーセンターで
の勤務経験といった話題が
取り上げられる。つい、そ
こに「事実」を読みたくな
る。語り手の「私」も作家

絶えざる更新の感覚

自身と重なる。

しかし、ここにはエッセ
イや記事とは違う、特有の
空気がある。事実を映すと
思えた文章はするすると崩
れ、私たちが読んだのが「事
実」ではなく、あくまで「文
章」だったとわかる。微妙
に気持ち悪いけれど、だか
らこそ刺激的なのだ。
話は脱線しがちだ。思い
がけないところで唐突な笑
い。かと思つと、語り手が
滔々と熱弁をふるう。日本
語が微妙に変で戸惑つこと
もある。「私は……」とい
う表現が幾度も出てきて、
通常の日本語の作法とはち



本を読む

本の値段は
税抜きです

がうようだ。まるで、その
たびに新しい「私」が出て
きて、新しい視点が導き込
まれるかのよう。
エッセイ集「試行錯誤に
漂う」で保坂は、小説的体
験とは「書かれたつある時
間の中に身を任せること」
だと説明する。絶えざる更
新の感覚の中で、どうとい
うことのないドライヴの風
景も朦朧とした神話のよう
に見えてくる。この試みの
背後には自己陶醉やノスタ
ルジアへの抵抗がある。
「私」への執着から自由にな
りたい。どこか緩いおかし
みも、自己愛を抑える禁
欲とセットになっている。
保坂が心酔したのは小島
信夫。静かな風情なのに、読
めば読むほど目が回るのは
二人に共通する作品世界
だ。(阿部公彦、英文学者)

よみうり堂から

きょうの「始まりの1冊」は、福
嶋亮大さんの『復興文化論』。東日
本大震災を契機に、無数の痛みをの
みこんできた日本の復興文化の歩み
を捉え直した力作です◆文学には、
現実に起こった惨劇・破局から人々
を救済する力があります。読書委員
の宮下志朗さんが書評で取り上げた
メリメ「タマンゴ」は、悲劇を記憶
し、語り継ぐことで文明を野蛮から
救います◆また、「人々を静かに共

し、夢の中の出来事のように『ハイ
チ震災日記』で記しました◆「懐か
しいすべてのものが失われた後、私
の心の中に祖国がなお存在するの
は、文学のおかげです」。そう語る
作家は、まさに文学の創造力を体現
しているように思えました。(良)

投書や、ご意見は電子メール(ho
nline@yomiuri.com)、ファクス(03
・3279・6482)、郵便(〒100・8055読
売新聞文化部「よみうり堂」係)で、
名前、年齢、住所、電話番号を明記
してください。

福嶋



サントリー学芸賞の贈呈式であいさつする(2014年12月)

サン SUN

見ずであれたこと——、それ
が本書の最大の美点という気
がする。

ふくしま・りょうた 1981
年、京都市生まれ。文芸評論家。
京都大学大学院文学研究科博士課
程修了。博士(文学)。立教大文学
部准教授。2014年に「復興文
化論」でサントリー学芸賞。17日
には早稲田大学坪内逍遙大賞奨
励賞に決まった。

近況
いまは平成文学の諸問題を検証す
るための著作を執筆中。グローバル
化と情報化にさらされたこの三十年のあいだ
に、言葉と出版をめぐる環境は激変しました。
この変革期の文学現象に対して、同時代人の
立場からその「意味」を考え、後世の批評に
バトンをつなぐのが目的です。

力はなるべく
ないVと粹が
て、△子供を思い出
気が狂いそうVにか
も大杉を求めてやま
誰も歩いたことの
しき女」への道でイ
つき、深山をさまよ
闘と苦悶、不安が書
滴り落ちてくる。(1
1300円)